

柳田國男が求めたもの

間 田 笑 子

今回の課題図書（海上の道）は難解でした。

何度読み返しても彼の言いたいことがはっきり掴めない。分からない出典や事例が随所に出てくる。そのたびに辞書をめくって調べる。彼の博識にはもうお手上げです。しかたなく私は、あちらこちらいろいろな本をめくって、柳田國男に関する評論を拾い読みしてみました。

そのなかで見付けたのは「柳田國男の文は評論や学問としてではなく、随筆として読むとよい」というものでした。

これなら楽です。細かい箇所はあまり気にせず、分からないところは跳ばして、とにかく読み終えてみました。

するとおぼろげながら、彼の大きな構想が見えてきたような気がしました。もちろん歴史的な考証や、考古学的な確証を得ることも大事なことなんでしょうが、そういったことは私の専門ではありませんし、実証する術も持っていません。ただ、彼の大きな口マンに魅せられて、終わりの何章かは、まるで物語のように読み進んでいくことができました。

明治の始め、日本は西洋の学問を輸入し、日本独自の文化をないがしろにしようとしていました。ところが、柳田國男は自分自身の手で、むしろ西洋の学問に対峙して、独力で民俗学を打ち立てようとしたのです。

そのために、あらゆる分野に関心を示し、一つ一つ民間伝承を聞き集めるために全国を行脚しました。こういったことができたのは、彼が農商務省の役人であったからです。

彼は、人間が（彼は『常民』と呼んでいます）保存した過去の残留（民間伝承として現在に残った常民の文化）の研究を通して、日本の民俗学を打ち立てようとしたのです。

ここで柳田が郷土研究の要件とした七箇条を挙げてみましょう。

- （１）「最終の目的はどんなに大きくてもよいが、研究の区域はできるだけ小さく区画して、各人の分担をもって狭く深く入っていくこと」
- （２）「近くから遠くへ。「すなわち、よくわかるものから、わからぬものへ進むこと」
- （３）「文書の価値はもちろん軽んじないが、その材料の不足が多いことを知って、常に力を自分自身の観察におくこと」

- (4) 同士の共同財産とするためにも「もっとも精確かつ忠実なる記録を遺すこと」
- (5) ちいさな、一見つまらぬことも「もと人間の始めた仕事である以上は、何か趣旨、目的のあったものに相違ないという推定から出発して一見わかりにくいものはことに面白くかつ重要なるべしと考えてかかること」
- (6) これを解釈する手段としてはできる限り多くの地方と「連絡を保ち、互いにあい助けて比較をして見ること。必要があればその比較を国の外、世界の果てまでも及ぼすこと」
- (7) 「たくさんの無形の記録を保管している人々に対して常に教えを受ける者の態度を失わず、まさに文字通りの同情をもってこれに臨むこと」

なるほど、柳田國男はこのような信念を持って独自の民俗学を作っていたのですね。特に(7)の信条には、学者としての彼の態度に共感すらおぼえます。私は柳田が偉大な民俗学者でありながら、上から民衆を見るのではなく、常に教えを請う者の態度を失わず、どんな些細なことも見逃さず記録に残したということに、大きな感動を受けました。

この「海上の道」のなかに、次のような一節があります。

「途方もなく古い話だが、私は明治三十年の夏、まだ大学の二年生の休みに三河の伊良湖岬の突端に一月あまり遊んでいて、このいわゆるあゆの風の経験をしたことがある。」

「そこには風のやや強かった次の朝などに、椰子の実の流れ寄っていたのを三度まで見たことがある。...ともかくも遙かな波路を越えてまだ新しい姿でこんな浜辺まで渡って来ていることが私には大きな驚きであった。」

この話が、後に有名な「椰子の実」の歌となるのですが、何というロマンでしょう！しかもその経験が、六十四年も後の「海上の道」(昭和27年初出、36年出版)につながっていったのです。(ちなみに、柳田は青春時代に森鷗外のところへ出入りしていて、文学上での友人を多くもっていました。その中に島崎藤村もいたのです。)

このことで、彼は稲作と日本人が南からやってきたという大仮説を打ち立てました。

昔、殷の王朝では寶貝は通貨として流通していました。それは秦の始皇帝が通貨を鑄造するまで、利用されたのです。その寶貝をもとめて南方から人が渡ってきたのです。しかも、そのきっかけは漁民の漂流であったのです。浜辺にちらばる寶貝の多さに喜んだ彼は、もう一度家族や郎党一同でこの島にやってきた...

これが柳田の主張ですが、何か突拍子もない感じを受けるのは私だけでしょうか。このような仮説の立て方は、彼の信条に反してはいないでしょうか。いま目の前にある確

かな伝承の積み重ねによって、彼の民俗学は成り立っていたはずですが、私は、なぜ彼が意に反してこのような論文を発表したのか考えてみました。

それには、時代という背景があったと思います。しかも八十七歳という高齢もあったでしょう。

柳田が民俗学に手を染めた頃の日本は、まだ民話や伝承の生きていた時代でした。彼が「常民」と呼んだ人々がいた時代でした。「遠野物語」の世界がそこかしこにあったのです。

ところが、この論文を発表した昭和三十年代、日本は高度経済成長の政策により、徐々に古い日本の姿が失われていきました。彼の親しい友人も亡くなり（折口信夫など）門下生も離れていき、彼の民俗学もいろいろな批判を浴びるようになりました。日本民族の出現に関する新しい学説（科学と実証に裏打ちされた）も発表されました。北方からの騎馬民族が、原日本人であるという説などです。

そこで彼は大きな賭（？）に出たのだと思います。まるで夢のような、ロマンにあふれた仮説を打ち立て、後に続く人たちへ、課題を残そうとしたのではないのでしょうか。それに、彼なりのプライドもあったことでしょう。

私の父は現在八十五歳で、今も古文書の研究に打ち込んでいます。立場は違いますが、父の姿と柳田の姿が私には重なって見えて、おもわず柳田に「がんばって！」とエールを送りたくなります。

彼は「海上の道」の最後でこう述べています。

「やや奇矯に失した私の民族起源論が、ほとんど完膚なく撃破せられるような日がくるならば、それこそは我々の学問の新しい展開である。むしろそういう日の一日も早く、到来せんことを私は待ち焦がれている。」

仮説をたてる、反論する、そのための実証をする。これが正しい科学のあり方だと、私は思います。そういった点で、柳田國男は民俗学者としての見事な終焉を、私たちにを見せてくれたのではないのでしょうか。

参考文献

「柳田國男」	色川大吉 著	講談社	昭和53年
「沖縄・先島への道」	司馬遼太郎 著	朝日文庫	昭和53年
「沖縄からアジアが見える」	比嘉政夫 著	岩波ジュニア新書	平成11年